

## 「その日のために備える」

イスラエルの初代の王、サウロが早々に失脚したことを私達は先週、見ました。彼は「神」を畏れることよりも「鼻から息する人間」を恐れたからです。「主のことばを退けたので、主もあなたをイスラエルの王位から退けた」（1サムエル15章26節）と書かれていますように、神様のみ心に従った道をサウロは歩み通すことができなかつたのです。

聖書はこのようにそれが王であっても、その王がたどった過ちを隠すことなく記しています。そうです、「鼻から息する人間」について包み隠さずにその姿を真実に書き記す書、それが聖書なのです。そして、私達はそこから有益な宝をいくつも見出すことができるのです。

今日はこのサウルの後を継いでイスラエルの二代目の王となりましたダビデを見ていきたいと思えます。ダビデは今日でもユダヤ人をはじめ、世界中の人達から慕われている人です。しかし、聖書は彼をも完全な人間としてあらわすのではなく、彼の弱さとか失敗というものも書き記しています。聖書は他の人たちと同じようにダビデの表も裏も描いているのです。今日はそんな彼の生涯から特に私達が彼から見習うことができることを見、来週はダビデの失敗に注目しましょう。

サウロは人の目を恐れしました。しかし、このダビデはサウロとは全く異なる思いをその心に持っていたようです。そう、彼のそんな片鱗は彼がまだ若い時に明らかになりました。

ダビデが生きた紀元前1000年頃、これまでもお話ししておりますようにイスラエルにはペリシテという宿敵がおりまして、彼らの間には度々、戦がありました。当然、当時の戦とはミサイルを飛ばしたりするものではなく、槍なり剣をもった者が一騎打ちをするような戦いでした。

そのペリシテの人間で、その名をゴリアテという男がいました。彼の身長は2メートル90センチメートル、ジャイアント馬場が2メートル9センチだと言われてますから、ゴリアテはジャイアント馬場よりも80センチも大きいことになります。彼は青銅の兜をかぶり、60キロもある鎧を身につけ、7キロもある巨大な槍を手にしたプロの軍人で、その男が戦いの前線で「俺と一対一で俺と戦う者はいないか」とイスラエルの民を挑発し続け、それが40日も続いたというのです（サムエル上17章4節-10節）。

イスラエルの男達はこの巨人ゴリアテを前にして恐れ、その時に「我こそは！」と名乗りでるものは誰もいなかったのです。そうです、この一騎打ちは相手が死ぬか自分が死

ぬかという戦いなのですから、彼らはゴリアテを前に自分は確実に殺されると恐れていたのでしょう。

そのように緊迫していた時、年若いダビデはまだ若く、軍隊にさえ入ることもできずに、羊の世話をしながら家におり、既に軍人となって戦いの前線にいる三人の兄に弁当を届けるように親から言われ、彼がちょうどその兄のもとに行った時に、ゴリアテがいつものごとくイスラエルの民を挑発しているところに居合わせるのです。

それを見たダビデの心は揺さぶられ「このペリシテ人は何者なので、生ける神の軍に戦いを挑むのか！」という思いが心に満ちます。彼が見ているゴリアテは他の人が見ているゴリアテと同じ人なのですが、彼はそのゴリアテを恐ろしい巨人として見るのではなく、神の前にある「鼻から息する人」として見たのです。そして、このダビデのことがイスラエルの王、サウルの耳に伝わり、ダビデはサウルに呼ばれ、サウルはダビデの内からみなぎる気迫を感じたのでしょう、自らの兜と鎧を身につけさせ、戦いに備えさせます。

しかし、それにしても軍人でもないダビデにゴリアテの相手をさせるとは、それだけイスラエルも行き詰っていたのでありましょう。ダビデは結局、着慣れていない鎧も兜も着けずに剣すらも帯びずに、谷間で選んだ石、五つと石投げをもってゴリアテに近づきました。当然、ゴリアテはダビデの姿を見、散々彼を侮ったのですが、ダビデは言います

「お前は剣と槍と投げ槍を持って、わたしに向かってくるが、わたしは万軍の主の名、すなわち、おまえがいどんだ、イスラエルの軍の神の名によって、おまえに立ち向かう。

今日、主はおまえを私の手にわたされるであろう……。この全会衆も主は救いを施すのに、剣と槍を用いられないことを知るであろう。この戦いは主の戦いであって、主が我々の手にお前達を渡されるからである」（サムエル上17章45節－47節）。

こうしてダビデは用意した石を石投げて投げますと、その第一投がゴリアテの額に当たり、そのまま彼はうつむきに倒れ、そこで終わりました。実にあっという間に決着がついたのです。ダビデは五つの石を使うまでもなく、その一つ目の石、すなわち彼の一振りでも終わりました。ダビデは後年、おそらくこの出来事をもって歌ったであろう歌を詩篇33篇13節－18節に残しています。

13 主は天から見おろされ、すべての人の子らを見、14 そのおられる所から地に住むすべての人をながめられる。15 主はすべて彼らの心を造り、そのすべてのわざに心をとめられる。

16 王はその軍勢の多きによって救を得ない。勇士はその力の大きいなるによって助けを得ない。17 馬は勝利に頼みとならない。その大きいなる力も人を助けることはできない。

18 見よ、主の目は主を恐れる者の上にある、そのいつくしみを望む者の上にある。

彼は巨人ゴリアテを前にして言っています「ししの爪、熊の爪から私を救いだされた主は、またわたしをこのペリシテ人の手から救い出されるでしょう」（サムエル上17章37節）。この言葉は彼がかつて羊の世話をしていた時に、神様が獰猛な獅子や熊から自らを守ってくれたという経験から生まれた言葉です。そして、その時に襲ってくる獅子や熊を倒したのも、きっとこのダビデの石だったのであります。

獅子や熊をも倒したダビデの投げた石がゴリアテの額にも命中しました。それにしても一発目の石がゴリアテの急所に当たったというのは偶然だったのでしょうか。いいえ、それは明らかに主を恐れる者に目を留める、ダビデの背後におられる神の力であり、同時にその日にいたるまでダビデが人知れずに来る日も来る日も石投げを練習した日々があったことでしょう。同時に彼の備えはそのような技術的なことだけではなく、ここぞという時に主により頼むということ、その備えがその時にできていたのであります。

イスラエルの男達は恐れおののき、ゴリアテの挑発に対して誰一人、一步も前に進みゆくことができない中、ダビデはそのゴリアテの前に「お前は剣と槍と投げ槍を持って、わたしに向かってくるが、わたしは万軍の主の名、すなわち、おまえがいどんだ、イスラエルの軍の神の名によって、おまえに立ち向かう。今日、主おまえを私の手にわたされるであろう」と大胆にも言い放ったのです。

そして、このダビデのこの言葉はその時、突然、降ってきたものではなく、彼のはったりではなく、日々の生活の中で彼の心に確信として備えられていたものなのです。そう、彼は年若くとも、常日頃から神が自分と共にいるということがどんなに大きな力であるかということをおもひめぐらし、それが心に刻まれていたのです。

私達のクリスチャンライフは「その日」がいつ来てもそれに立ち向かうことができるために日ごとに主の前に備えるようなものです。ダビデはこのようにして「神の力」と「その時に既に備えられていたもの」によりゴリアテに勝利したのです。

ダビデのように、私達の人生にも戦わなければならない時があります。そのような時は私達にとって突然の非常事態ですから、私達はその時にそれに向き合うために色々な準備を始めます。しかし、その時に準備を始めても遅いのです。常日頃から自らの心を整え、心備えをしていること、ここぞという時にその日々の備えが私達を守り、私達に勝利をもたらすのです。

さてダビデはこのゴリアテとの戦いに勝利することにより、一介の羊飼いかから、イスラエル初代の王、サウルの兵の隊長となります。そして、神様が彼と共におられましたゆえに彼は行く先々で手柄をたてます。彼の人気は広がり、町では「サウルは千を撃ち殺し、ダビデは万を撃ち殺した」というような歌までが歌われるようになり、それはサウル王の耳にも聞こえるようになりました。当然、サウルの心は穏やかではいられなくなります。その頃からサウルの心は不安定になり（聖書はその状態を悪霊が激しくサウルに臨んだと記しています）、槍を振り上げ、ダビデを何度も殺そうとします。いよいよ命の危険を感じた彼はサウルのもとから逃亡し、サウルはダビデを執拗に追いかけます。そのように逃げ回る自分の姿をダビデは「死んだ犬、一匹の蚤」（サムエル上 24章 14節）と表現しています。「一難去って、また一難」とはよく言ったもので、ダビデはゴリアテの時とはまた違う、新たな戦いの中に置かれていきます。

そんな中、サウルを筆頭に自分に迫る者達から逃げ続けていた時にダビデには二度、サウルの命を取る決定的な機会がありました。一度はほら穴の中において、ダビデはサウルの息の根を止めることができる状況におり、ダビデの従者達も「この時こそがチャンスです」とダビデに言うのです。しかし、その時にダビデは剣が届くすぐ傍にサウルがいるにもかかわらず、彼がサウルに対して殺意を持っていないということを証明するために、その上着のすそだけを切ってその場を立ち去ります（サムエル上24章1節-7節）。しかし、すぐに彼はそのことについて、自分したことについて心の責めを感じてこう言いました「主が油を注がれたわが君に、わたしがこの事をするのを主は禁じられる。彼は主が油を注がれた者であるから、彼に敵して、わたしの手をのべるのは良くない」（サムエル上24章6節）

ダビデには再びある夜、同じようなチャンスがおとずれます。サウルの陣に彼らが下っていってみると、サウルの陣の者達もサウルも眠っていました。まさしくその時もサウルを槍で一突きすることができるチャンスでした。しかし、ダビデはこの時も言うのです「彼を殺してはならない。主が油を注がれた者に向かって、手をのべ、罪を得ない者があるうか。主は生きておられる。

主が彼を撃たれるであろう。あるいは彼の死ぬ日が来るであろう。あるいは戦いに行って滅びるであろう」（サムエル上26章9節、10節）。

相手は半狂乱となり、自分の命を狙う者、そんな相手に対してダビデは敬意を失いません。なぜでしょうか。サウルがダビデにとって良き王だったからでしょうか。いいえ、そうではありません。サウルは血眼になってダビデの命を狙う人です。その殺意たるや、狂気に満ちています。しかし、ダビデは主が油を注がれた者に手をくたすことを畏れたのです。ダビデは鼻から息をするサウルを恐れたのではなく、ダビデに命の息を吹きかけた神を畏れたのです。

自分を追い詰める者が自分の剣で突き刺すことができる場所にいる。殺されるか、殺してわが身を守るか、大抵、その時、自己防衛のために人はためらうことなく剣を振り下ろすでしょう。そのようなチャンスの時に、このよう思いはダビデに突然、天から降ってきたのでしょうか。いいえ、あの時、ゴリアテを前に常日頃から備えていたことにより、恐れず、動じず、勝利を得たように、この度もその時にいたるまでの間にダビデが主の前に備えていたことが、彼の心であり、その備えられていた心がダビデの言動を制したのです。

彼は神が選ばれたものに対して任職の油を注ぐということを知っていました。何を隠そう、彼自身、サムエルを通して神に油を注がれた人です。彼は自らの頭から滴り落ちる油の感触を思い起こしながら、自分が神から直々に受けた使命というものを日ごとに思い、その天来の使命を厳粛なものとして受け止め、人の手でそれを取り除いてはいけないのだということを彼は知っていたのです。

ダビデはイスラエル史上、最も神に近く、神と共に生きた人間です。彼は王であり、政治家であり、軍人でありました。そのような人間は聖書の中にたくさんでてきますが、彼にはその人達もっていない賜物がありました。何だかご存知ですか。私達はそのことを気に留めることはあまりありませんが、それは明らかにダビデという人間の大切な一部分となっています。そう、彼は聖書中、稀に見る詩人であり、歌人であったということです。詩篇には彼が作詞して、楽器に合わせて歌った歌がたくさんあります。そして、その詩は全て神について歌われたものであり、またその神の前にある自分に関するものでありました。すなわち、日々、ダビデは神の恵み深さ、神の偉大さ、神の力と慰め、そのようなことを心に思いながら、暮らしていたのです。彼が詩人であり、歌人であったということは、すなわち彼は言葉の人であったということであり、彼は神が彼に語りかける御言葉に心を寄せ、それを思いめぐらすことを日常としていた人だったので。そう、それらの日々の心備えがあったゆえに、彼はゴリアテに勝利し、ここぞという時の判断の時に主の御心を思い起こし、それに従うことができたのです。

以前、「Facing your giants」という礼拝メッセージのシリーズをしている牧師の教会に行ったことがあります。そうです、その牧師は私達の前に立ちはだかる「大きな試練」を「ジャイアント」と呼びました。時に私達はこのようなジャイアントに向き合わなければならないことがあります。それは病であったり、経済的な問題であったり、家庭の問題であったり、死であったりします。巨人、ゴリアテの前に立ったダビデのように、時にそれらが突如、私達の前にはあられることがあります。ダビデにとって狂信的なサウロに命が狙われたこともそれは彼の後を執拗に追いかけてくるジャイアントを意味したことでしょう。

しかし、ダビデは前から、後ろからそのようなジャイアントに囲まれても、彼の心は整えられ、備えられていました。そうです、彼にはそのようなジャイアントに対して、どう向き合えばいいのかということが予め、備えられていたのです。そのダビデの備えとそれに伴う神の力がダビデと共にありましたので、彼はこれらのジャイアントに勝利をとることができたのです。彼はかつてこんな唄を歌いました。

『4 主をおのが頼みとする人、高ぶる者にたよらず、偽りの神に迷う者にたよらない人はさいわいである。

5 わが神、主よ、あなたのくすしきみわざと、われらを思うみおもいとは多くて、くらべうるものはない。わたしはこれを語り述べようとしても多くて数えることはできない』（詩篇40篇4節－5節）。

ダビデの偉大さは語り述べることができないほどに多く、神のなさるくすしきみわざと神が自分を思うみおもいを知っていたところにあったのです。そして、それは一朝一夜で彼が得たものではなく、彼が日ごとに主の前に出続けたゆえに会得することができたものなのです。ダビデには諸々のジャイアントを前に、予め備えられた引き出しが幾つもあったのです。

主にある皆さん、我々も日々、聖書に親しみ、神に祈り、神のみ思いを思う時を生活の中に確保しましょう。そのことにより、突如、私達の前にあらわれたジャイアンツの一撃から私達は守られ、逃れの道が備えられます。そのことにより、家庭を揺さぶるようなジャイアントの出現に対して私達は最善の決断に導かれることを信じます。このようなことがコツコツとなされ、そこに神の御手がおよぶ時に、私達の人生は主にあって盤石なものとなっていくのです。今日も明日も、コツコツコツコツ、主の御言葉に聞き、それを私達の心の糧としていきましょう。

お祈りしましょう。